

## パネルディスカッション 「地域の教育情報化と大学の役割、京都の今!」

コーディネータ

林 英輔

麗澤大学教授、同情報システムセンター長

NPO 柏インターネットユニオン 副理事長

パネリスト(五十音順)

岡部 寿男

京都大学 学術情報メディアセンター 教授

中村 好宏

京都市総合企画局情報化推進室情報政策課 課長補佐

藤末 邦政

京都府立京都すばる高等学校教諭

森木 隆浩

京都府企画環境部企画参事(IT推進担当)付



CAUAシンポジウム2003 京都

林 パネル討論を始めたいと思います。今日のシンポジウムのテーマは地域コミュニティの活性化です。それに対して情報コミュニケーションがどのような貢献ができるか、地域の教育力の強化を切り口に検討していきたいと思います。まず、パネリストの皆様が関わってこられた事業やプロジェクトのご紹介からお願い致します。

## ■京都府の情報化施策

森木 本日は2003年11月25日に完成を迎えたばかりの京都府の情報基盤である「京都デジタル疎水ネットワーク」<sup>[1]</sup>を中心にお話します。

京都といえば古都京都をイメージされる方が多いと思いますが、京都府は南北に長く多様な地域特性があります。そこには50校あまりの大学があり、関西文化学術研究都市（学研都市）<sup>[2]</sup>には世界的な研究機関が集積しています。京セラやオムロンなど世界的な企業もあります。そしてなんととっても歴史的文化的なコンテンツが豊富にあります。ただこうした情報資源は京都市以南の南部地域に集中しており、ブロードバンド普及でも南北の地域格差があります。

ですから京都府にとって、南北格差の解消は永遠のテーマであり、京都デジタル疎水ネットワークでもこの解消を図るという思いがこめられています。

「疎水」というネーミングですが、明治時代に東京遷都によって沈滞する京都の復興を目指し、第3代京都府知事の北垣国道が提唱した大事業である琵琶湖疎水<sup>[3]</sup>から採ったものです。琵琶湖疎水により京都は水運、飲料水を確保し、水力発電により新しい工場ができ、日本で初めて路面電車が走り、今なお京都の重要な基盤になっています。それをふまえ、平成の時代の新しい京都府作りの基盤と

なって欲しいという思いを込めて京都デジタル疎水ネットワークという名前をつけました。流れるものは物から知識・情報に変わりますが、情報化の恩恵を京都府全域にもたらしたいということです。

デジタル疎水ネットワークは、京都市内に中央接続拠点を設け、そこから南北それぞれに2.4Gbps幹線リングを敷設しています。府内に6箇所の接続拠点を設け、それ以外に京都大学、学研都市、京都IXに1Gbpsで接続しています。行政機関のほか、大学、学校、医療機関、研究機関、民間企業やインターネットサービスプロバイダー等に広く開放されます。



図1. 京都デジタル疎水ネットワーク図

京都市内の大学が京都ONE<sup>[4]</sup>に繋がっておりますので、デジタル疎水は京都市以外の大学を接続します。高校の普通教科「情報」の開始に合わせて、全府立学校、養護学校等を100Mbpsで接続した「新みらいネット」<sup>[5]</sup>が、2003年4月からデジタル疎水の一部として運用を開始しています。府下の全市町村も繋がっておりますので、市町村の地域イントラネットやケーブルテレビを経由して市町村立の小中学校もデジタル疎水に繋がってきます。このようにデジタル疎水ネットワークは、京都府内の小中高等学校、ほとんどの大学、研究

機関が接続されますので、全国有数の教育芸術ネットワークとなります。

デジタル疎水の教育分野での活用として、まず高大連携を考えています。京都府内の大学は南部地域に集中しており、北部地域の高校にとってなかなか大学の授業を体験する機会がありませんので、北部の高校と京都市内の大学を結んだ高大連携を考えております。大学以外にも、学研都市にある雇用・能力開発機構の私のしごと館<sup>6)</sup>、大川センター<sup>7)</sup>、原研関西研究所<sup>8)</sup>などのコンテンツをデジタル疎水を活用して、府内各地域で体験できるようにしたいという構想も持っています。

大学と地域の連携した事例もでてきています。舞鶴市では、大学連携センターを設立され、立命館大学の大学院講座や大学コンソーシアム京都<sup>9)</sup>のプラザカレッジの講座を遠隔受講できるようにされています。また、京都工芸繊維大学と京都府織物・機械金属振興センターとの間で、社会人向けのデザイン講座をデジタル疎水を活用して配信する予定です。

教育分野では、京都では5年程前からエデュテイメントフォーラムというものも実施しております。これはエデュケーションとエンターテインメントを合わせた言葉で、楽しく遊びながら学ぶものです。エデュテイメント分野における情報発信とコンテンツ集積、あるいは総合的な学習の時間の推進、そしてコンテンツ開発者と教育関係者とのマッチングを目指しています。産業分野を主導で進めてきましたが、今年度からは教育委員会との連携も強化したいと考えています。

近畿ブロック知事会で広域ブロードバンド圏構想というものを打出しており、デジタル疎水と他府県のネットワークとの連携も検討しています。具体的には滋賀県、兵庫県等との接続を検討しています。

最後になりますが、京都府では「地域と人

をむすび育てるIT活用プラン」を策定中で、教育・人づくりの分野では、①教育情報の総合窓口ホームページとしてのポータルサイトを設置、②大学の遠隔講座や学校間連携による多様な学習機会の充実、③府立学校のOA教室以外の普通教室のネットワーク等の整備、④人材育成・人材活用支援としての教育情報化コーディネーターの学校への派遣、⑤情報教育推進体制の整備、ということを考えています。

## ■京都市の情報化施策

**中村** 今日お話するテーマは大きく二つございます。一つは、京都ONE構想の紹介で、その主な取り組みとしての大学情報ネットワークという基盤のお話と、その基盤を活用するeラーニングの取り組みについてです。もう一つは現在京都市が、大学のまちとして策定しております新しいプランの紹介です。

まず京都市では2003年5月、地域情報化を進めるために「e-京都21」<sup>10)</sup>という計画を作りました。その目標の一つに「情報流通基盤の整備」を掲げ、その主要施策として、「京都ONE構想」を進めることと致しました。なお、今後は通信だけでなく、eラーニングコンテンツや音楽や映像など情報が流通する基盤が重要になると考え、あえて「情報流通基盤」という言葉を使っております。

京都ONEとは、京都地域に開かれたWANをつくり、京都の市民生活や産業活動などの京都地域内の活動を一体的に向上させることを目的としています。よく京都ONEのONEとは何かと聞かれますが、実はワイドエリアネットワークの「WAN」と、京都を一つにまとめたいという思いの「ONE」にかけてあります。そんな思いで担当がつけた名称が、そのまま正式名称に決まってしまうました。

京都ONEのネットワークの真中に地域IX

があります。これを核にしてJPIX<sup>[11]</sup>やSINET<sup>[12]</sup>へ接続され、地域ISPや民間iDCとも繋がっています。また、大学情報ネットワークとも繋がっていますし、京都市の小中高校がBフレッツを介して繋がっています。そして一番特徴的なのが、京都府の京都デジタル疎水ネットワークとも高速で繋がっていることです。

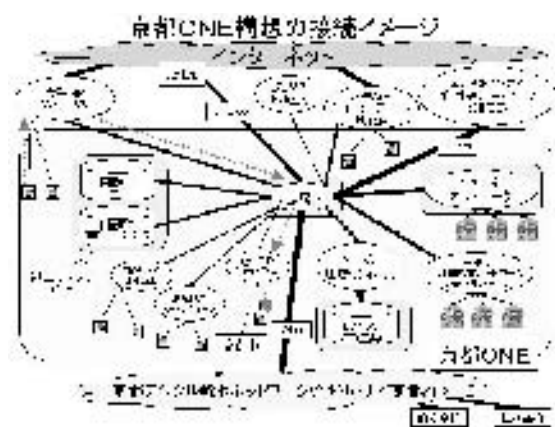


図2. 京都ONE構想の接続イメージ

京都ONEは地域情報化の主要施策ですから多面的な取り組みをしております。そのなかで今回のシンポジウムに関係の深い大学情報ネットワークについてお話をします。これは京都に数多く集積する大学を高速な情報通信ネットワークで結ぶことにより、大学間の連携、学際研究、産学公連携のよりいっそうの促進を図るものです。

大学情報ネットワークは、京都リサーチパークに位置する京都高度技術研究所<sup>[13]</sup>、京大<sup>[14]</sup>の吉田キャンパス、京都駅前のキャンパスプラザ京都<sup>[15]</sup>の3地点を、ダークファイバーを借りて600Mbps、600Mbps、1Gbpsの三角形のループで構築されています。そのループのアクセスポイントに、京都市内にある大学に光ファイバーで繋いで頂くようお願いしています。現在、国立大学3校、公立大学1校、私立大学13校、それに他府県から8校、

研究所が2つで計27の大学研究機関が接続または接続予定となっています。

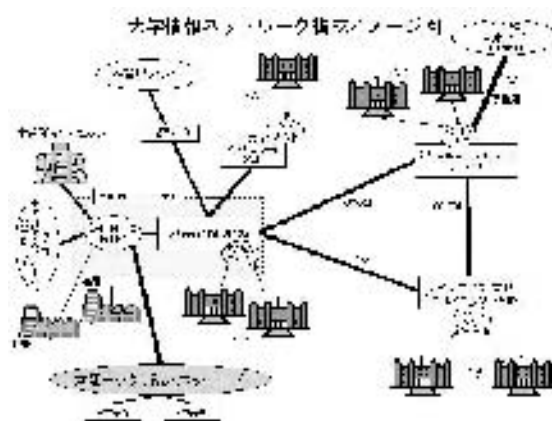


図3. 大学情報ネットワーク構成イメージ

大学のまち京都としては多くの大学に接続して頂いて、日本における大学情報ネットワークの一大拠点にしていきたいと思っております。今、大阪市、大阪府、神戸市とも連携の話が進んでおります。

現在、京都ONEを活用したeラーニングプロジェクトを三パターンほど検討しているところです。第一は大学から発信するeラーニングで、本来のeラーニングだと思います。大学が戦略経営の一環として学内の豊富な教育研究資源を活用した魅力的なeラーニングコンテンツを開発してどんどんネットワーク配信して学生を増やしていこうというものです。おそらくこれも段階的に整備されていくことでしょう。最初はPRのため公開講座を無料で配信していく。次は京都独自のお茶やお花などお金の取れそうな講座を有料配信していく。最終的には何らかの資格をとれるところまでもっていく。おそらく時代はこちらへ流れていくでしょう。

第二は、大学が活用するeラーニングです。司法試験や公務員試験を学生が受けるにあたって、大きな大学では予備校から先生を連れてきてトレーニングしています。例えば英語

検定、コンピューター操作の資格などをeラーニングを使って共同で開発して共同で使う、ということです。先ほどの27大学が連携をすればかなり安く開発、調達できる可能性があります。

三つ目は大学が連携するeラーニングです。大学コンソーシアム京都では単位互換制度をおこなっていますが、現在は学生が実際に相手先の大学で講義を受ける必要があります。しかし、移動時間がかかるので履修できないということがあります。他大学の先生の講義を遠隔で受けることにより移動コストが無くなるということができるかもしれません。

最後になりますが、大学のまち京都推進懇談会というところで「大学のまち京都21プラン」を現在検討しております。このプランには基本的な姿勢が四つあります。一つは魅力ある大学づくりと大学のまちの発信。二つ目が多文化交流時代に対応した人材の集積と交流の促進。三つ目が産学公地域連携による活力あるまちづくりの推進。四つ目が魅力ある学生のまちの充実と地域との交流促進です。

この中の一つ、「魅力ある大学づくりと大学のまちの発信」の中に「小中学校や地域との連携」として、「小中学校や地域の学習活動、多様な市民活動などに大学の教員、学生が積極的に協力、関与する仕組みを作り、大学と小中学校、大学と地域の交流を進め、お互いの学習、研究活動の高度化を図る」ということがプランに書いてあります。

## ■高校の情報化の現況

**藤末** 京都府立京都すばる高等学校の藤末と申します。私は高等学校で物理を教えていましたが、ある時から情報に関わるようになり、旧「京都みらいネット」の設計、構築、運用に携わっておりました。その後京都府立商業高等学校に赴任しましたが、2003年4月から

情報科が設置されるなど学校が新しく変わりましたので京都すばる高等学校<sup>16)</sup>という名前になりました。

本校は、情報科のある専門高校ということもあり、情報化は少し進んでいるかと思えます。生徒はコンピューターを日常的に利用して特に検定前、課題提出前はコンピュータールームが6部屋ありますが、それらがいっぱいになります。また、ノートパソコンを使って無線LANを利用して教室からネットワークが利用できるようになっています。生徒にとっては割と使い心地のいい環境にあるのではないかと思います。

では最近の生徒の活動の一部を紹介しましょう。本校では2002年9月から2003年7月までの1年間、龍谷大学と高大連携を行い、毎週金曜日に大学に伺い四つのゼミナールに計76名の生徒を参加させていただきました。この1年間で写真やビデオや報告書がたくさん残りましたので、生徒が活動記録を収めたCDを作成しました。このCDはジャケットから中身のコンテンツまで全て生徒が作り上げたもので、教員は文言修正のアドバイスをした程度です。

さらに京都みらいネットを活用して、電子商取引の実習をやっており、今年が4年目になります。「FushoNetデパート」というのですが、ベリサイン社より証明書を頂き、学校にSSLのWebサーバーを立ち上げ、商品を販売するサイトを立ち上げています。これも生徒が画像、HTML、JavaScript、CSSなど全て作成し、文言の修正以外は教員の手が入っていない状態です。

こうしてみると私たち教員が動くよりも、生徒がその気になって動くほうがはるかに大きな力を出せると感じています。情報機器の活用能力は、私たちの年代よりも生徒たちの伸びがはるかに大きいと思います。そういう意味で、生徒の潜在能力は非常に大きいと感

じております。ただ問題は情報モラルまで育つわけではないということです。

では教員側はどうかというと、LANは職員室にも来ており、教務の業務はかなり電算化されているので、通知表などは電算処理して出すことができます。アドレスを変えVLAN等で生徒のネットワークと分離しセキュリティにも配慮しています。

他の府立高校の環境もご説明しますと、どの高校にも40台のパソコンが設置された実習室が必ずあります。また、プロキシサーバとメールサーバが設置されており、どの学校も生徒用のメールアカウントを自由に作成できます。2003年4月に新「京都みらいネット」が開通してから、ストレスなしの快適なネット接続が可能となっています。

最後に少し課題をお話させていただきますと、情報教育や情報活用能力の育成、これを他の教科を含めてどう連携を取るかということです。いろいろな教科でパソコンを利用できればという思いはありますが、様々な理由でなかなか利用できないでいます。これらをどうしたらいいか、が教育の情報化に関わる思いです。

## ■課題と大学への期待

**林** 府行政、市行政、学校現場のそれぞれの立場から情報化について大変貴重なお話を頂きました。京都全体の情報化はたいへん素晴らしい、学ぶべきところが数多くあります。しかし、そうした京都でさえも課題があることが分かってきました。現在感じておられる課題と大学への期待について、再度ご発言をお願い致します。

**藤末** 課題としては、ハード、ソフト、教員のスキルの三点が挙げられます。普通教室でネットワークが使えるようになった際に、そ

れを活かすも殺すも教員のスキル次第です。柏インターネットユニオン (KIU)<sup>[17]</sup>のお話を聞いても、大学の教官や学生は高いスキルがあるように感じました。ネットデイなどの形で私たち自身にも教えていただく機会が京都にあれば教育の情報化がかなり進むのではないかという思いがあります。私たち教員はなかなか外に出る機会がありませんが、そのような機会が是非とも欲しいと思います。

**林** 最初にインフラの問題ですが、行政の方もいらっしゃるのであえて問題を複雑にしたいと思います。

柏市での経験でいいますと、20教室ほどの中規模学校のネットワーク敷設を業者に見積らせると500～700万円位になります。これをネットデイでやると、材料費のみの50万円位で出来てしまいます。しかし一校50万で工事をするというのは、市内の工事会社からすれば酷いことをやっているわけです。

柏市も自治体として校内LANを整備していますが、予算の問題で毎年数校しか整備できません。行政から見た時にネットデイのようなやり方でいいのか疑問はありますが、年次計画でネットワーク整備が10年先になる学校は待ちきれないのも事実です。横展開する場合の問題は、行政から見るとかなり大きなものであるように思われます。

二番目の教材ソフトの整備は全国共通の問題で、ソフトとコンテンツにかかるマンパワーの量がものすごいので、大学は何ができるかいろいろ知恵が欲しいと思っています。

最後の問題はとても大事な問題で、おそらく大学院の教員再教育制度の問題につながるのではないかと思います。

**中村** 先ほど、京都市の小中高校は光ファイバーで繋がりましたと申し上げましたが、実際のところモデル校は使っていますが、他は

なかなか使えない、という声をいただきます。京都市教育委員会に聞きますと、現場の先生方のレベルは全国でも上位クラスにあるということです。しかし一人の先生で30人の子供にITを教えようとしたら、ほぼ不可能に近いでしょう。

京都市で地域住民向けのIT講習会を実施した経験では、40人に教えようとする講師以外に2~3人の補助員が必要です。

そこで地域ボランティアなり大学の学生が、先生のサポート役として、子供がコンピューターを使う時に教室に3人位いてくれたらいいと思います。つまり学生が教員を助けてくれるITアドバイザーとかサポーターのような形ができると思います。

実はまだ軌道に乗ってはいないのですが、京都ソフトウェアアプリケーション<sup>[18]</sup>という京都市の外郭団体でもそれを動かそうとしたことがあります。ニーズとしては教職免許を取りたいという学生さんが結構いらっしゃるの、インターンシップとまでいきませんがトレーニングの場として来てくれればと、個人的なアイデアとして思います。

もう一つ、大学情報ネットワークに接続いただいている大学にお話を聞いたのですが、教育系でない大学でも、小中学校の子供達が使う新しい教育コンテンツを開発したがついていたり、小学校の子供達のユニークなアイデアを引き出すコンテンツを作っている大学の研究室があったりします。そういうところとも大学情報ネットワークと連携して何か出来ないかと思えます。また、ネットワークを使った教育方法を研究されている大学も市内には多いので、そういうところと小中高校が連携できたらと思います。

**林** いまのお話は、我が意を得たり、というところがあります。

私どもの大学はごく普通の文科系の大学で

す。それでも学生達が地域貢献を行うことで、それが学生の教育になっています。京都には京都大学をはじめ多くの大学があり、大勢の学生がいます。また、こういった学校支援に関しては工業高校の生徒もかなり役に立ちます。WIDEプロジェクトの人たちは、高校生にやらせたらよいと盛んに言っています。

そういう意味で学生や生徒にとって、地域貢献することが自分達の勉強にもなるような活路があれば望ましいと思っています。

**中村** 神戸市教育委員会の方から聞いたのですが、工学系の大学には、工業高校の授業を聞きたいというニーズもあるそうです。大学も出すばかりではなく、お互い助け合いができるのではないかと感じました。

**林** 高大連携も一方方向でなく、双方向でありうるということで、大変興味深いですね。

**森木** 藤末先生のほうから、ハードやソフトの課題として、普通教室への校内ネットワークの整備を挙げていただきましたが、それは来年度以降の「IT活用プラン（案）」に記述してあります。小中高校の先生方にも入って頂いて作ったプランですので、ニーズはふまえていると思います。ただ、非常に厳しい財政状況の中でその実現には困難が伴います。文科省では平成17年度までに普通教室全てにネットを整備するという目標を掲げていますが、京都府は現状数パーセントの状況です。

私どもIT推進や教育の情報化の担当者からすると校内LANは最低水準の目標で、是非とも整備が必要なのですが、それがどういう効果があるのかを常に問われます。ネットデイもご提案を頂いて考えておりますが、委員の先生方からは「本来行政が責任を持ってネットワークを整備をするものであって、行政からネットデイをやりましょうというのはあ

る意味責任放棄だ」とのご意見もあってプランには載せておりません。ただ今後そういう可能性も否定できないとは思っています。

**林** 言い換えれば、これだけ立派な京都でも、ネットワークボランティアの活動の余地はあるという示唆ですね。

**森木** 兵庫県などはネットデイを盛んにされている実績があります。京都では舞鶴で1ヶ所と聞いたことがあります。

**林** ネットデイに関していいますと、その地域のボランティアがやるということに非常に大きな意味があります。よそから来る外人部隊では、やはりその後の運用に臨機応変に支援することは難しいですし、地域の人たちが自分達の地域に貢献するということに非常に大きな意義が見出されるのだと思います。

最後に岡部先生に、今までのいろいろなご発言を踏まえ、大学に何ができるのかご意見をお願い致します。

**岡部** 大学がIT関連で社会に貢献できることとして、まず一つは先端技術の提供があります。あるいは世間が誰も食べていないものを、とりあえず大学で味わってみるということがあります。

ネットデイに関しては、今日はパネル討論なので、あえて反対のことを言います。京都大学では15年程前に学内ネットワークの整備を行い、学内の主要な建物全部に10Mbpsのリンクが行くという、当時としてはかなり先端的なことをしました。しかしそのあと建物内のLANは各部局に任せることになり、まさにネットデイ的なことを学内でやりました。学内で気心も知れていますので、それなりにうまくいっておりましたが、今から10年位前に破綻しかかりました。ネットがどうな

っているのか判らない、誰が引いたか判らないという状況になってしまったからです。どこかでネットデイ的アプローチは歯止めをかける必要があると思います。

京都大学の場合は、それではいけないということで3年前にKUINS-Ⅲ<sup>[19]</sup>というネットワークを引きました。これは各部屋の情報コンセントまで学術情報メディアセンターが責任をもって提供し、ユーザーは部屋の中の配線に責任を持つという仕組みにしました。それはセンターにとってはものすごい負担になったわけですが、やむをえません。

あと他にも遠隔講義の技術やeラーニングなどは大学が貢献できることだと思います。人材育成に関しては高校の先生が大学に留学するとか、大学院の修士号をもらえるようにするということも考えられます。これには先生が行きやすいように、高校のほうでも制度を作っていただくことも必要だと思います。

社会的貢献でいいますと最近セキュリティーポリシーということがいろいろと言われておりまして京都大学でも教育機関向けのセキュリティーポリシーを作っています。高校で使うには手を入れる必要があると思いますが、参考にして頂きたいと思っています。また情報倫理に関しても早い段階から教えていく必要があると思います。

我々大学から地域に対して活動する上で逆に要請することもあります。一つはインフラの整備です。京都では京都ONE、デジタル疎水をつかっていろいろできるようになりました。たとえば以前は舞鶴の水産実験所と繋ぐのにダイヤルアップをしていましたが、100メガでつながるようになりました。それはすぐに近くの大学・高校をつなぐ技術に活用できると思います。

しかし一番必要なのは市民の方の声援です。例えばALAN-Kプロジェクトでも京都市と交渉していて難航することもあるのです



が、PTAの方がちょっと口を利いてくださると状況が一気に変わるということもあります。私たちも努力しなければなりません、地域の方もご協力頂けると有り難いと思いません。

ここから先は私見ですが、京都大学として反省点がいくつかあります。まず京都大学は地域貢献の視点が非常に希薄です。世界を見ていて地域のことは考えていられないという者もいますが、それはおかしいと思いません。

もう一つ、産学連携は最近でこそ言われるようになりましたが、必ずしも積極的でないということです。私の恩師の時代には産学連携は恥ずかしいことだったそうで、表面的には変わってきていますが、我々教員の意識改革が100%なされているかというところでもありません。

大学コンソーシアム京都という枠組みの中で単位互換制度がありますが京大だけ行っていません。大学間の連携も積極的ではありません。

京都大学が今後何をしていく必要があるかといえば、まず近隣の大学と競争していかないとはいけません。今までは京都大学の名前で優秀な学生が何もしなくても集まるというモデルがあり、過去20年ぐらいは本当にいい学生が来てくれました。しかし少子化の時代ですからこれからは厳しいです。特にすぐ近くに大阪大学という強力なライバルがありまして、科研費の獲得金額は同じか逆転かというところまできており、学生の偏差値までひっくり返るようなことになれば京都大学としてプライドを保てなくなります。これからは優秀な学生をとる努力をしないといけないと本当に思っております。

そのためのキーポイントとして高大連携があります。京都というのは非常に教育熱心な土地柄ですから、そういうところから良い学生をある程度の割合でとる努力をすべきで

す。ですから京大は自分の所に良い学生を取りたいというエゴもありますが、高大連携を進めるべきだと思っております。

林 ここで会場からもご意見を頂きます。

会場 京都市内の全ての学校では入札で校内LANが整備されています。ある学校から校内LANの調子が悪いといわれて見に行ったことがあります。そうしたらひどい工事で、LANの端子が圧着されていないとか、結線が間違っていたりしました。今の入札では、工事の検収が図面の配線確認のみで、実際の接続チェックをしないのです。試しにネットデイをした学校と、業者が入札で工事した学校を比較してみると面白いかもしれません。



図4. パネルディスカッションの様子

言い換えれば、工夫の足りない学校現場に、幾ら行政がお金を出してもきりが無いということです。一方、大学の教官は自分の才覚で研究費を掻き集めるのが当然です。学校がもっと工夫するように大学は刺激を与えて欲しいと思います。また、そういった外部からの刺激に対して、行政側が柔軟に受け入れられれば、地域貢献もうまくできると思います。こういう取り組みによって、京都が他の都道府県のモデルとなる地域になって欲しいと思います。

林 ネットデイに関して言いますと、工事業者と同じかそれ以上のことをしないとダメです。KIUでも素人工事になることを懸念して苦労しました。特殊工具を揃えましたし、学生達も後輩に技術を引き継ぎ、内部の講習会を何度もやって鍛えています。

それから、単なる任意団体がやったのでは責任がもてないので、法人格をもった組織で責任をもってやるべきです。そのためにNPOという道があります。

そしてKIUは入札に参加しません。やはり地域産業の振興は大事だからです。入札に参加しないと、まだネットデイの意義は失われていないと思いますが、我々もネットデイをやる時代は早晚終わり、大学はもっと教育の中身に触れた分野で貢献すべきだと思っています。

## ■まとめ

林 時間も来ましたので、最後に纏めをしたいと思います。まず、全体として受けた感想は、京都のアプローチは非常に先進的で、そういう意味で参照価値が非常に高いということです。目的に対するアプローチの豊富さとレベルの高さは賞賛に値すると思います。

特に地域行政の地域情報化に対する積極性が非常に高いと思います。しかし「e都市ランキング」などでは京都はトップグループではないのです。これは情報施策の評価の問題なのですが、技術革新と共に施策も変わりますので、従来の評価手法が陳腐化してしまいます。政策科学として難しい課題ですが、こうした政策評価の面でも京都の先進性を見せて頂きたいところです。

地域情報化、e都市ランキング、高大連携を見ていくと京都にもやはり課題があります。情報化の密度をどうやって高めていくかが京都の課題であり、これは全国の地域の課

題でもあると思います。ただ、感心したのは、異なる組織間のネットワーク相互接続の柔軟性が高く、上手くいっていることです。影の努力はものすごいと思いますが、性格の異なる組織をつなぐのは大切です。特に京都府と京都市の連携がいいのはうらやましい。地方公共団体でも大学でも、競争と連携のバランスがこれからの一番大きな課題だと思います。地域と学校の縁結びの神は大学の役割だろうと思いますし、そういうことを仕組む大神の役割が行政だろうと思います。

京都で気がつくのは、行政や市民からの大学への期待と支援が非常に大きいということです。「大学のまち京都」という意識が大学と市民それぞれに強いのでしょうか、大学の情報公開も活発で、市民の大学に対する感心が大きいというのも特徴だったと思います。その関係では行政が大学連携の支援までやっています。大学の相互接続というのは非常に大事で、大学が持っている知的財産をお互いに活用しながらかつ競争していく、それが日本の大学のレベルを高めていくことになります。

そして多少個人的ですが、京都IXには是非成功して頂きたい。京都で地域IXがきちんと機能するとういのは大きな目印になります。地域のネットワークのピアリングは重要ですし、全国にネットワークのピアリングが進むといいと思っています。

京都の実践というのは全国への刺激が非常に大きく、「高度地域情報化は京都に学べ」と思いました。何を学ぶかといえば、大学と地域行政、市民の意識のマッチングの重要性、足並みを揃えていくことの重要性です。こうした必要性の啓蒙も大学の役割なのですが、京都大学は実際にそういうことをされていると思います。京都大学が育てた人材があちこちにおいて、それが市民の声になっていたりする。そのことを行政も良く知っていて、大学の役割に期待したり、大学が何をするかに関

心を持ちたりしています。

それからALAN-Kプロジェクトは非常に京都大学らしく、素晴らしいと思います。京都大学が関係しているプロジェクトを見ると、先見性の重要性を感じます。われわれはとすると目先の問題を回避するだけの仕事をしているくらいがあります。本来の大学らしさというのを京都で見るという感じがして面白かったです。

やはり最近になって京都府全体で立派なプロジェクトが勢ぞろいしているのは従来の積み重ねだと思えます。継続の重要性、地域の特性に根ざす重要性を感じます。そして各所に出てきた人と人との連携、人の育成が重要だと思えます。学校から見ても行政から見ても、リーダーの育成が大切です。京都でも、情報化の次世代の担う若い人材を輩出して、良い事例を出していただけたらと思えます。

最後にもうひとつ、遊びの感覚も重要です。ボトムアップ活用の場合、現代人感覚にマッチした活力の根源がそこにあるように思います。広範囲の連携が成功しているのも一つの秘訣だと思えます。京都の例を通じて地域間連携が重要だと改めて感じました。

パネリストの先生方、どうもありがとうございました。会場の皆様、長時間ご清聴頂きありがとうございました。以上でこのパネルを閉じたいとおもいます。

#### ■参照可能URL

- [1] 京都デジタル疎水ネットワーク  
<http://www.pref.kyoto.jp/sosui/>
- [2] 関西文化学術研究都市  
<http://www.kri.or.jp/>
- [3] 琵琶湖疎水  
[http://www.city.kyoto.jp/suido/biwako\\_sosui.htm](http://www.city.kyoto.jp/suido/biwako_sosui.htm)
- [4] 京都ONE  
<http://www.kiic.or.jp/kyoto-One/>

- [5] 京都みらいネット（京都府教育情報ネットワークシステム）  
<http://www1.kyoto-be.ne.jp/ed-center/mirai.htm>
- [6] 雇用・能力開発機構・私のおごと館  
<http://www.shigotokan.ehdo.go.jp/>
- [7] 大川センター  
<http://www.camp-k.com/>
- [8] 日本原子力研究所・関西研究所  
<http://www.jaeri.go.jp/jpn/section/06/>
- [9] 財団法人大学コンソーシアム京都  
<http://www.consortium.or.jp/>
- [10] e-京都21(京都市情報政策課)  
<http://www.city.kyoto.jp/html/sogo/jyoho/index.html>
- [11] JPIX  
<http://www.jpix.co.jp/jp/>
- [12] SINET学術情報ネットワーク  
<http://www.sinet.ad.jp/>
- [13] 財団法人京都高度技術研究所  
<http://www.astem.or.jp/>
- [14] 京都大学  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>
- [15] 財団法人大学コンソーシアム京都  
<http://www.consortium.or.jp/campusplaza/>
- [16] 京都府立京都すばる高校  
<http://www1.kyoto-be.ne.jp/subaru-hs/>
- [17] NPO柏インターネットユニオン  
<http://www.kiu.ad.jp/>
- [18] 株式会社京都ソフトウェアアプリケーション  
<http://www.kysa.co.jp/>
- [19] KUINS  
<http://www.kuins.kyoto-u.ac.jp/>

2003年11月28日

「CAUAシンポジウム2003 京都」

パネル・ディスカッション報告  
書記：CAUA事務局

## 特集の最後に

CTCアカデミックユーザアソシエーションは、2003年度に「CAUAシンポジウム」を2回開催しました。6月の東京シンポジウムでは、大学、図書館、NPOの地域情報化への貢献をテーマとし、11月の京都シンポジウムでは、大学、学校、行政の地域情報化への取り組みをテーマとしました。それぞれに切り口は違っていますが、底流となるテーマは「IT時代における、大学の地域貢献の在り方」でした。

このところ地域の活力低下の問題が顕在化し、教育問題や治安悪化の要因にもなっています。一方で少子化等の影響もあり、大学も地域との共生が不可欠な情勢となってきました。これは逆から見れば、地域と大学の連携が要請される時代といえることができます。文部科学省も2004年1月に「地域づくり支援室」を設置するなど、行政も教育・文化による地域活性化の有効性に気づき始めています。

しかし、教育や文化を活用した地域活性化の概念が社会的に普遍化するのには喜ばしいことですが、忘れてならないのは地域の問題を地域で解決する自律性ではないかと思われまふ。本特集は、そうした観点から地域高度情報化に関する貴重なコンテンツを得ることができた京都シンポジウムの内容を取り纏めたものです。

(CAUA事務局)